令和５年度実施　教員採用試験の結果と考察

教職支援センター
特任教授　宮　本　晃　郎

教職支援センターの要覧には、次のような教員養成の理念が示されている。

建学の精神である「自立心」「対話力」「創造性」を培う教育は、「正に現代の教員として必要とされる資質能力」の育成につながると明記されている。この理念に基づいて、平成１９年度に開設された教職支援センターは、教育部門と事務部門が一体となって目的達成のために実践を年々積み上げている。

令和元年度末からのコロナ禍にあっても、学内の多様で堅実な連携によって、着実に成果をあげてきている。学生一人一人の願いを受け止めながら、それぞれの目標が達成できるように努力を重ねてきた結果だと言える。

一方で、過去の教員採用試験では考えられなかったような変化が、相次いでいる。こうした変化にも的確に対応しながら、新たな方策やさらなる連携によって、一段と効果的な学生支援を展開したいと考えている。

１．教員不足対策を進める各教育委員会と採用試験の変化

近年の「教職離れ」とは別に、次のような要素も加わって、学校現場での教員確保は喫緊の課題となっている。それは、「男性教員の育休」や「女性教員の育児短時間勤務・育児部分休業」「介護休暇」等を必要とする教員が増えているため、一段と教員の確保が重要なのである。

全国的に臨時講師不足が極めて深刻な状況となっており、「担任不在の欠員状態」が慢性化している。そこで、目的に応じて加配されている教員（総務・学習指導担当教員／生徒指導担当教員／児童支援教員等）が急遽学級担任をしたり、非常勤講師を複数動員して担任の代行として対応したりしている学校が多い。副校長や教頭が学級担任をしている学校も珍しくない状況となり、現場からは悲痛な声が多数上がっている。

そのため、各自治体の教育委員会では、かつてない深刻な事態に対して通常の対策では困難だと判断して大胆な採用対策を行ってきている。まさに、「背に腹は代えられぬ」との思いで、次のような方策が年々広がっている。

●受験者の負担軽減と注目策

・受験内容の縮減（実技や小論文等の廃止）
・試験時間の短縮
・受験会場の増設（例；関西会場の新設）
・地元優先や現職特別待遇等の特別選考
・筆記試験等の免除要件の緩和
・願書等提出の簡略化
・多種多様な加点制度

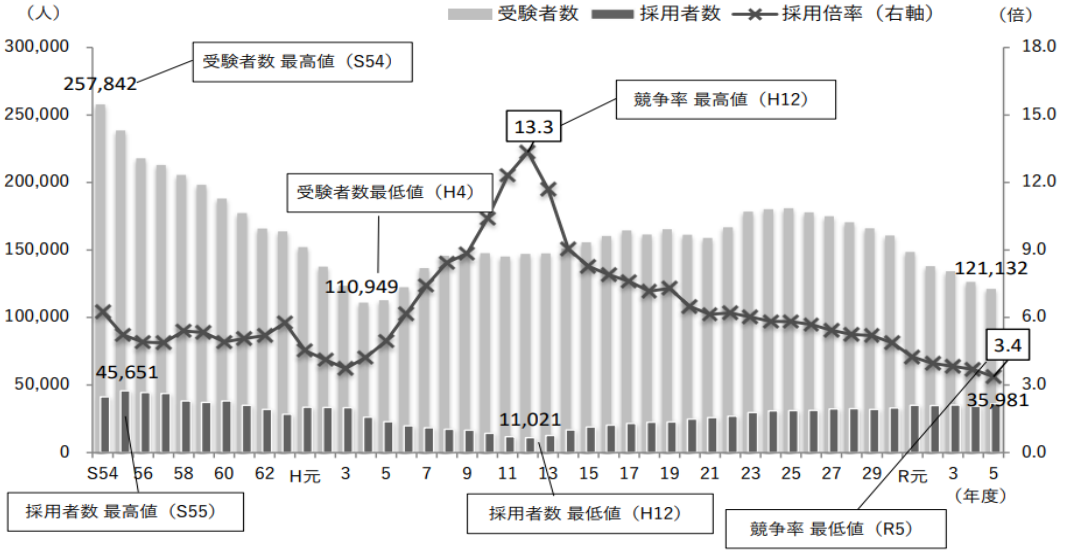
●大学三回生等への受験可能

●教員免許をもたない人も受験可能

●採用数を大幅に上回る合格者発表
●任期付き教員や補欠合格、追加合格の増員
●受験日や合格発表の早期化
●秋受験の実施増加
●事前研修の充実や経済的援助の増加

文部科学省も、さらなる教員採用試験の早期化の方針を打ち出しているものの、その標準日に合わせている教育委員会は決して多くない。「教育実習」や「大学教育」との兼ね合いもあるため、今後の動向は極めて不透明である。採用倍率の推移を見ても、各自治体の教育委員会はさらなる新機軸を打ち出してくる可能性がある。

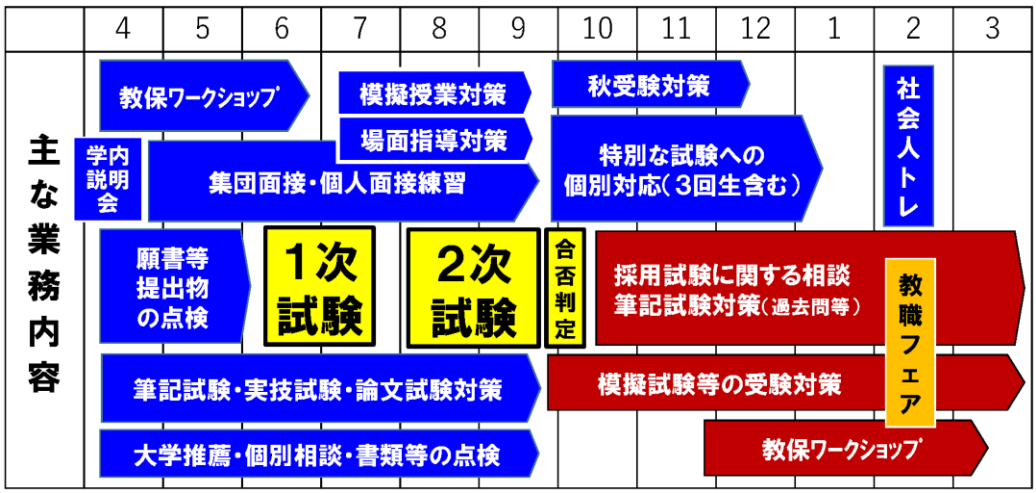
図1　総計　受験者数・採用者数・競争率（採用倍率）の推移



（注）「総計」は小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、養護教諭、栄養教諭の合計

２．教職支援センターによる着実な取組と新たな取組

教職支援センターの組織運営については、毎月開催される「教職支援センター運営委員会」を軸に展開されている。年間の主な取組は、以下の通りである。



学部や学科を越えて、教職を目指す学生のために様々な角度から支援していくことになる。

須磨キャンパスとポートアイランドキャンパスに分かれているが、教職支援センターとしては定期的に「合同ミーティング」を開催している。そして、関係する教職員に対して「教職支援センターだより」を配付している。学生に対しても、常にkissシステムやmanabaを利用しての諸連絡とともに、学内の掲示物を通じて広報にも力を入れている。

主な取組と新たな取組について、概要を紹介する。

（１）教保ワークショップ・学内説明会・願書等点検

例年１１月下旬や１２月上旬から「幼保」「小学校」「中高」「ポーアイ」の４つのグループに分かれて実施している。見通しを持って採用試験に臨めるようにするために、必要な最新情報を提供している。さらに、学生同士のつながりを大切にして、ワークショップの名前の通り、少人数での主体的な活動も採り入れている。

３回生の後期からスタートして、４回生の前期では学内説明会（教育委員会事務局による教員採用試験に向けた説明会）ともリンクして開催することもある。学生にとっては、数多くの自治体の学内説明会を聞くことで、教職に向けた意識を高めるとともに志望する自治体決定の判断材料にもなっている。４月になると、連日願書の記載内容に関する確認や様々な文章表現の添削で教職支援センターに来室する学生であふれる。ゼミの先生やクラス担任の先生と相談した内容を丁寧に伝えてくれる学生も多い。願書の手続き上のミスが減るとともに、提出する文章表現もブラッシュアップされ、非常に効果があると考えられる。

（２）集団面接・個人面接（模擬授業・場面指導等）・実技や論文対策

面接練習は長期間に及んで、最も時間をかけて取り組んでいる活動である。自治体ごとの特色を踏まえて、細かな対策をとっている。実際には、昨年度までの先輩たちが残した詳細な試験記録や東京アカデミーを筆頭に教育関係企業の情報を参考にしている。そして、個別に具体的なアドバイスを行い、「自己理解」を深め、「教育関係」の話題にも自分らしく適切に表現できるように努めている。

教育実習や授業との関係で、なかなか面接練習がしにくい学生には、自分のスケジュールを見て積極的に選んで参加できる「平日フリー枠」や「土日フリー枠」を設定している。

実技やＩＴＣの模擬授業など、関係教員の協力も得て、学生が少しでも安心して受験できるように取り組んでいる。

（３）大学推薦・個別相談・模擬試験等の受験対策・教職フェア

各自治体の大学推薦枠や条件は、毎年のように変化している。しかも、募集期間も方法も多種多様であるため、非常に煩雑で神経を使う作業である。事務部門とも緊密に連携して、確実な説明や募集、選考、面接確認、書類確認が進めていかなければならない。ゼミの担当教員とも力を合わせて、学生にとってベストな選択をしていく必要がある。

こうした重大な決定とともに、そこに至るまでの様々な学生一人一人の相談にも粘り強く対応していくことが重要である。来室しての直接相談から、オンライン個別相談、メールや

電話での相談などもある。教職に進むかどうかの相談から、校種選択や、自治体選択、合格後の最終決定に向けての相談など千差万別である。こうした相談に丁寧に対応していくことが、信頼関係の構築にもつながっていく。教採の勉強の仕方や筆記試験の問題の解き方などに対する悩みから、来室する学生も着実に増えている。模擬試験の結果に対して助言を求める学生や３回生受験をするかどうかの相談も多い。また、１回生や２回生の来室も増加傾向である。入学者人数は減っているが、教職への関心度は高いと言える。

（４）秋受験・三回生受験対策　その他

本年度は、佐賀県の小学校枠の「秋受験」にチャレンジする学生がいた。その学生は、高知県から追加合格があったものの、佐賀県を受験した。その際には、試験対策を個別に組んで支援することになった。保護者の理解と応援もあり、しっかりと準備ができ、合格を勝ち取ることができた。

さらに、神奈川県の中高家庭科の「３回生受験」にチャレンジする学生もいた。その学生は、神奈川県出身であり、真剣に取り組んでいた。計画的に面接練習や模擬授業等の準備も進めて、学習指導案作りにおいてもきめ細かく支援することができた。最終結果として合格となり、本学にとっても初の３回生受験合格者となった。かつてないスケジュールによって秋から冬にかけて連日受験対策をすることになった。今後も、そのようなスケジュールになることを予感させる本年度の取組だった。

３．令和５年度実施の教員採用試験結果と経年変化［令和６年２月時点］

本年度実施の全体の結果を示すと、次のような結果であった。

	総受験者	1次試験合格	2次試験合格
❶公立幼保	50	38	19
❷小 学 校	154	126	83
❸中・高等	60	30	16
❹養護教諭	10	0	0
❺栄養教諭	5	2	0
全体合計	**279**	**196**	**118**

注；私立幼稚園・私立保育園・認定こども園は除く。

のべ人数

総受験者２７９人のうち、１次試験に合格した学生が１９６人である。計算すると、約７０％の合格となる。しかし、そこには大学推薦によって、１次免除の学生も一定数いることも理解したい。

さらに、２次試験の合格者が１１８人なので、合格率は約６０％となる。しかし、１次で合

格したのに２次試験を「辞退した学生」もいるため、実質の合格率はもっと高いと言える。このように考えると、推薦の免除や辞退者のことも含めて、データを出すことが望ましい。

❶公立幼保	総受験者 A+B	推薦免除 A	1次受験 B	1次合格 C	2次辞退 D	2次受験 A+C−D	2次合格 E	任期付き合格	最終辞退 F	最終採用 E−F
2021	72		72	46	3	43	29		0	29
2022	39		39	20	0	20	15		0	15
2023	50		50	38	6	32	19		0	19

左の表は、公立の幼保である。この３年間の経年変化も見ていきたい。

参考資料;「私立幼稚園・私立保育園・認定こども園」

	R3（R2実施）	R4（R3実施）	R5（R4実施）
私立　こども園（保育所型）	4	1	1
私立　こども園（幼稚園型）	1	1	1
私立　こども園（幼保連携型）	17（内2辞退）	28	30
私立　保育所	17（内3辞退）	15	20
私立　幼稚園	5	3	1

公立以外の結果は、左の通りである。人数的には受験者数が減少する中でかなり健闘していると言える。実質的には大きく躍進している。引き続いて、小学校から順々に校種や職種別の結果を示したい。

❷小学校	総受験者 A+B	推薦免除 A	1次受験 B	1次合格 C	2次辞退 D	2次受験 A+C−D	2次合格 E	最終辞退 F	最終採用 E−F
2021年度	226	18	208	140	25	133	101	45	56
2022年度	187	23	164	123	20	126	102	54	48
2023年度	154	19	135	126	18	127	83	40	43

※最終突破率…「総受験者数」÷「２次合格者数」

小学校は、総受験者数が年々減少している。ただ複数受験する学生が多くこれまで「のべ人数」によるデータ発表がメインであった。２年連続で「１００人以上の合格」という快挙も達成している。そして、最終突破率にも着目してみたのが、次の資料である。

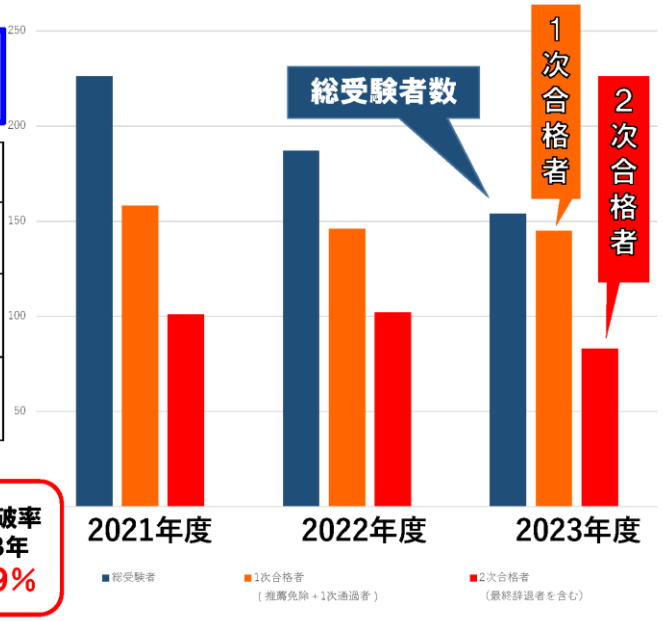
小学校・合格のべ人数と最終突破率の経年変化

のべ	2021年度	2022年度	2023年度
総受験者	226	187	154
1次合格者（推薦免除A＋1次合格C）	158	146	145
2次合格者（最終辞退者を含む）	101	102	83

最終突破率 2021年 44.7%

最終突破率 2022年 54.5%

最終突破率 2023年 53.9%



２年前の２０２１年度と比べると、本年度の「合格者のべ人数」は減っているが、「最終突破率」では９％以上アップしている。さらに、実人数で見ていくと、次のような資料もある。

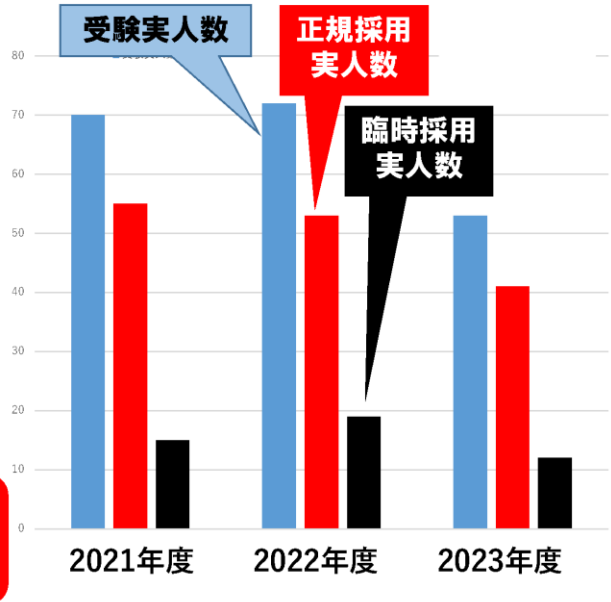
小学校・受験実人数と「正規採用」率の経年変化

実質	2021年度	2022年度	2023年度
受験実人数（小学校）	70	72	53
正規採用［実人数］	55	53	41
臨時講師等［実人数］	15	19	12

正規採用率 2021年 78.6%

正規採用率 2022年 73.6%

正規採用率 2023年 77.4%



実際に「正規採用率」を実人数で見ていくことで、毎年８割近い学生が正規教員として採用されていることが分かる。

一方、中学校・高等学校の総受験者数は増加している。大学推薦枠の拡大や合格者の増加により、先輩から後輩に「がんばれば教師になれる」という思いが確実に受け継がれていると言える。

❸中・高校	総受験者 A+B	推薦免除 A	1次受験 B	1次合格 C	2次辞退 D	2次受験 A+C−D	2次合格 E	最終辞退 F	最終採用 E−F
2021年度	40	3	37	22	3	22	13	4	9
2022年度	47	10	37	20	2	28	25	13	12
2023年度	60	10	50	20	7	23	17	5	12

しかし、最終突破率は、年度によって大きく異なる。また、教科によっても合格者数・合格率は、大きく異なっている。小学校と同様に、実人数でデータを見直すことも重要である。

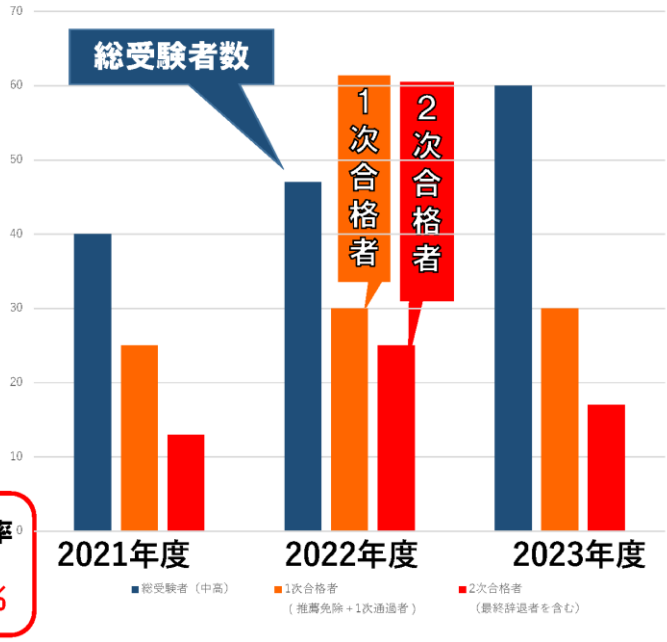
中学校・高等学校の合格のべ人数と最終突破率の経年変化

のべ	2021年度	2022年度	2023年度
総受験者	40	47	60
1次合格者（推薦免除A＋1次合格C）	25	30	30
2次合格者（最終辞退者を含む）	13	25	17

最終突破率 2021年 32.5%

最終突破率 2022年 53.2%

最終突破率 2023年 28.3%



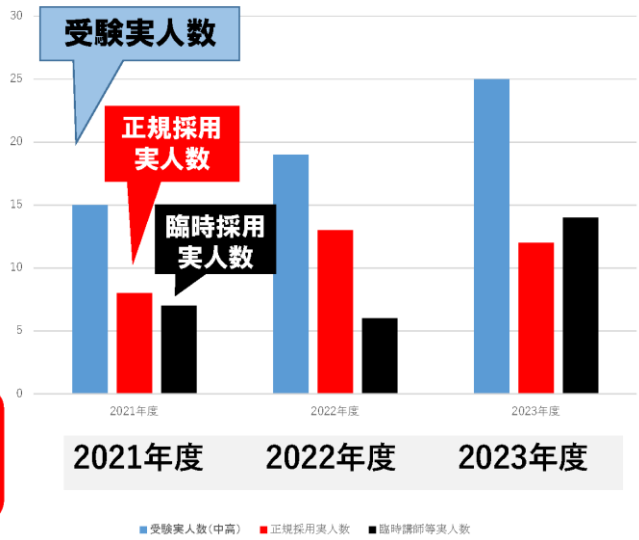
中学校・高等学校受験実人数と「正規採用」率の経年変化

実質	2021年度	2022年度	2023年度
受験実人数	15	19	25
正規採用［実人数］	8	13	12
臨時講師等［実人数］	7	6	13

正規採用率 2021年 53.3%

正規採用率 2022年 68.4%

正規採用率 2023年 48.0%



受験者が増えた要因として、各学科で「教職の魅力」を伝えていただいていることや、全国の教育委員会の採用担当者を一堂に会しての「教職フェア」を開催したことがある。さらには夏のオープンキャンパスで「教職 mini フェア」を開催して、既卒生との交流もプラスに働いている。現役の学生と既卒生との豊かな交流も、教職を選択するうえで大きなポイントである。

		国語	社会	家庭	英語	保体	合計
2021（令和３）年度	受験者実数	2	2	5	6		15
	合格者実数	0	1	5	2		8
2022（令和４）年度	受験者実数	4	6	6	3		19
	合格者実数	4	0	6	3		13
2023（令和5）年度	受験者実数	3	9	7	3	3	25
	合格者実数	3	0	7	1	1	12

各教科別の結果は、左記の通りである。本年度は初の保健体育教員が誕生することになった。正規教員としての合格も喜ばしいが、臨時講師として就職する学生の意識が高いことも素晴らしい。

❹養護教諭

	総受験者 A+B	推薦免除 A	1次受験 B	1次合格 C	2次辞退 D	2次受験 A+C−D	2次合格 E	任期付き合格	最終辞退 F	最終採用 E−F
2021	1		1	0	0	0	0		0	0
2022	6		6	1	0	1	0		0	0
2023	9	1	8	0	0	0	0		0	0

❺栄養教諭

	総受験者 A+B	推薦免除 A	1次受験 B	1次合格 C	2次辞退 D	2次受験 A+C−D	2次合格 E	任期付き合格	最終辞退 F	最終採用 E−F
2021	3		3	1	0	1	1		0	1
2022	7		7	1	0	1	0		0	0
2023	5		5	2	0	2	0		0	0

養護教諭も栄養教諭も、依然として倍率が高く、現役合格は非常に困難である。それにも拘わらず、積極果敢にチャレンジする学生が毎年いる。教保ワークショップの充実や効果的な面接練習にも、一層力を入れていきたい。

そして、何よりも筆記を中心とした１次試験の突破が大きな鍵である。自治体別の採用枠も年度によって大きな変動がある。そのため、採用人数が「若干名」の自治体よりも、「２桁採用」の自治体を選ぶことも多い。個々の事情を踏まえて検討している。

さて、年々拡大している「大学推薦」について、経年変化を見ていくと、下の通りである。

	令和 3年度	令和 4年度	令和 5年度	
小学校 受験	18	23	19	合計60 平均20
小学校 合格	10	17	14	合計41 平均13.7
中高養栄 受験	12	10	11	合計33 平均11
中高養栄 合格	6	8	3	合計17 平均5.7

大学推薦を受けたからと言って、必ずしも合格に直結するものではない。反対に、推薦がないからと言って悲観する学生も一部いるが、決して合格が遠のいたわけではない。その意味では、大学推薦を受ける段階から、学生一人一人の願いや心配事にも目を向けて、この制度の有効活用に取り組みたい。同時に、大学推薦のない形での受験者の方が圧倒的に多いことからも不安を取り除いて「勢いのある受験」となるように声掛けを続けたい。

新しい取組として、4回生に「アンバサダー制度」を創設し、1回生から3回生に対する様々な情報提供や提案・助言等の場を設けることになった。4回生の分かりやすい言葉と、熱いメッセージは後輩たちからも大好評だった。

本学のよき伝統として、既卒の先輩が大学に来て現役の学生に対して模擬授業を見せたり、学校現場の様子を紹介したりして、意欲と意識を高めてくれる。時には、面接練習のアドバイスもしてくれる。さらには、既卒生自身も他の自治体を再受験する場合には、休日を利用して面接練習そのものに参加する。こうした関係性も「神女のよさ」である。

次々と教員採用試験をめぐる制度上の改革や、各自治体の取組の変化は年々加速している。

本年度末には、幼保関係の採用担当者も迎えて、「第2回神女フェア」を開催した。今後も、教育委員会との連携を強め、学生に最新情報を分かりやすく提供したい。そして、教員採用試験は「団体戦」との言葉通り、切磋琢磨して『夢の実現を目指す神女』であり続けたい。

「神女教職フェア」、「夏の mini 教職フェア」の取組について
―未来への第一歩 ～きく・はなす・つながる～　幼保・教員志望者への支援の工夫―

教職支援センター
特任教授　宮　垣　　覚

１　はじめに

現在、全国で教員の働き方改革が進められているが、教員の不祥事や教員不足、教員採用試験の志願者数の減少などのニュースもあり、「実際に教育現場はどうなの？」ということは学生にとって不安であり、とても気になるところである。そこで、本学は全国各地の教育委員会等から直接話をきく合同説明会「教職フェア」や先輩の現役教員にリアルな教育現場の話を聞く「夏の mini 教職フェア」を開催し、教職を志望する学生を支援している。特に「教職フェア」は、一つの大学が多くの自治体・教育委員会を集めて実施するもので全国的にもめずらしい取組である。以下に、本学独自の二つの取組について報告する。

２　教職フェア（未来への第一歩 ～きく・はなす・つながる～ ）

目　的：①1 年生から各自治体・教育委員会の採用担当者と会話をすることで将来のイメージを具体的に意識することができる。
②早期キャリア教育により採用試験合格者の増加をめざす。
③教員養成の大学として、教員不足解消を目指し地域に貢献する。

(1) 第 1 回教職フェア（場所：神戸女子大学　須磨キャンパス）

日　時：2023 年 1 月 27 日（金）　13：00～15：00

参加者：参加自治体・教育委員会〔対面説明会（11)、遠隔説明会（2)、資料提供（1)〕
学生　135 名（教員をめざす 1 年生～4 年生）

関東・近畿・中四国から 14 自治体・教育委員会の採用担当者から、教員を志望する本学学生に、直接アピールをしていただいた。個別にも、集団にも気軽にご対応いただき、学生達は楽しそうに各自治体・教育委員会の教室を訪問していた。また、4 月からその自治体で働く者を中心に 4 回生が各自治体・教育委員会の教室をサポートした。

(2) 第 2 回教職フェア（場所：神戸女子大学　須磨キャンパス）

日　時：2024 年 2 月 9 日（金）　13：00～17：00
13：00～16：00　説明会
16：00～17：00　参加自治体・教育委員会の交流会

参加者：自治体（幼保）　対面説明会（11)、資料提供（2)
教育委員会（小中高養栄）　対面説明会（13)、遠隔説明会（1)、資料提供（4)

学生　190 名

第 2 回は、説明会を 1 時間延長し、保育士・幼稚園教諭を目指す 1 年生～4 年生にも対象を拡大して実施した。それぞれの教室において各自治体・教育委員会の採用担当者から、直接学生達に各県市等の魅力や特色、仕事のやりがいや採用試験の内容まで詳しく説明していただいた。さらに、説明会終了後に交流会を開催し、参加自治体・教育委員会や本学教職員と積極的な情報交換が行われた。

集団説明会

個別説明会

交流会

(3) 学生の感想

・いろんな自治体の特色や求められる人物像など、様々なことを知ることができ、出身県だけを受験しようと思っていたけれど、他の自治体も受験しようと考えが変わりました。
・候補になかったけれど魅力的だった自治体がありました。また、複数の自治体を比較して考えることができ有意義な時間でした。
・試験の事だけではなくて、「住んだらこんな所ですよ」という街情報も知ることができ、是非行ってみたいと思いました。

(4) 自治体・教育委員会の感想

・学生は真剣に話を聞き、説明後の質問も多く、積極的に参加していました。また、サポートしてくれた学生さんのお陰でスムーズに進めることができました。
・学生と直接話をすることができ、今後、より学生のニーズに合わせた説明会を実施できるよう工夫していきたいと思います。
・教職をめざす多くの学生に、様々な選択肢や情報を与えられたことは大きな意味があったと思います。この素晴らしい取組を続けていただきたいです。
・廊下を歩いている学生の様子をみていると、まじめで、笑顔がすてきな印象でした。
・他の自治体等の広報などの取組も参考になり、人事担当者同士情報交換ができました。

(5) まとめ

この取組は、学生にとって貴重な情報収集の機会となっているとともに、各自治体・教育委員会からの本学学生の評価が高く、大学自体のよい PR の場ともなっている。

各自治体・教育委員会からは、通常の説明会よりも時間が長いこともあり、他の自治体等との情報交換ができること、直接学生と会話することでよりニーズがわかり、さらに元気をもらったなど好意的な意見が多かった。一つの大学の取組にも関わらず、多くの自治体・教育委員会に参加いただき、人事担当者の話を伺う中で人材確保の真剣度が伝わってきた。

このように本大学と参加自治体・教育委員会の双方にメリットにある取組となっており学生への支援を中心に置き、さらに充実させていきたい。

3　夏の mini 教職フェア（「教師」ホントにやってみた！-現役教員の先輩に聞いてみよう-）

教師の働き方改革が進められていると言われている中、学生の中には「本当に進んでいるの？」「実態はどうなのか？」など不安に思っている者も多くいる。そこで、教師になった先輩たちに母校に戻ってきていただき「リアルな教員生活」を聞く会を実施した。

場　所：神戸女子大学　須磨キャンパス

日　時：2023 年 8 月 11 日（金）　10：30～15：00

10：30～12：00　Talk 番組風シンポジウム

13：00～15：00　・現役教員（11 名）による模擬授業

・学生のためのフリートークや個別相談

・現役教員による模擬授業・面接指導（4 回生 5 名）

参加者：現役教員（21 名）、学生（46 名）

(1) Talk 番組風シンポジウム

「幼稚園・保育園」、「小学校」、「中・高・養護・栄養」の 3 グループに分かれ、教職支援センターの教員が司会となり、現役教員等に学校現場の実態や詳細な給与等を含めた実際の生活状況、教師になってうれしかったこと、しんどいことなどを詳しく話していただいた。参加した学生からも積極的に質問が出、笑いも多く活発なトークの場となった。

(2) 現役教員 11 名による模擬授業

実際の授業で使った模造紙、タブレットや iPhone、プロジェクターを活用し、さすが現役教員と思わせる工夫がたくさん詰まった模擬授業だった。学生には、「授業とは何か」、「何を大切にしているか」が伝わり、自分の模擬授業の目標となるとても刺激的な時間であった。

(3) 学生のためのフリートークや個別相談

もっと詳しく、個人的なことをじっくり現役教員に聞いてみる時間。聞きたいことがたくさんあり、時間が足りないようだった。

(4) 現役教員による模擬授業・面接指導

4 回生 5 名が、模擬授業と面接に臨み、現役教員から自らの受験の経験をもとに、厳しくも丁寧な指導・助言を受けた。教職支援センターの教員の指導とは異なり、現役教員ならではの視点があり、学生は新たな刺激を受けていた。

(5) 参加した学生の感想

・私は、1 回生で「自分は教師に向いているのか、なれるのか」と不安を感じ始めていたのですが､今日の話を聞いて先輩方も沢山壁にぶつかりながらも努力されていることを知り、教師になれるよう自分にできることを頑張ってみようと思えました。

・普段の授業では聞けない細かい収入やしんどいこと、辞めたいと思ったときの話などを詳しく聞けてよかった。私も先輩のような保育教諭になれるようにがんばります。

・教師というと大変な仕事と言われていますが、先輩方が楽しそうに教師について話されている姿を見て、とてもやりがいを感じて、楽しみながら働いておられるのだなと感じました。教師になるモチベーションも上がりました。

(6) 参加した現役教員の感想

・意欲的な後輩の姿を見て、学生時代の自分を思い出し、また頑張ろうと元気がでてきました。学生のみなさんは、ぜひ、がんばって教師という夢を実現させてください。

・久しぶりに母校に戻って、先生方にも会え、懐かしかったです。

シンポジウム

現役教員の模擬授業

模擬授業・面接指導

個別相談

4　最後に

このような取組ができたのは、アットホームでまじめな校風の中、先輩から後輩へ受け繋がれる本学の学生の人間関係の良さがある。さらに全国で本学出身者が教諭として活躍しており、各自治体の本学教育への理解と積極的な協力のお陰である。

今後も教職支援センターとして、本学の良さや強みを活用し、うまく先輩と後輩を繋ぎながら教職を志望する学生を全力で支援していきたい。

教育実習（模擬実習・教壇実習）について
—実習の事前準備—

日本語日本文学科
教授　安　原　順　子

１．はじめに

生徒や学習者を前にした教育実習(模擬実習・教壇実習)では、なにを教えるかという授業内容だけでなく、そのための「事前の準備」や「事後の振り返り」も重要である。生徒や学習者にとっても、よりスムーズに学習が進むかどうかの分かれ目ともなるからである。筆者は、日本語日本文学科に所属し、同時に外国人のための日本語を教える日本語教員の養成を担当している。日本語日本文学科では、毎年、国語科教員志望学生のために「教職研鑽会」実施している。その際も、「教育実習(模擬実習)」において、「事前の準備」や「事後の振り返り」という国語科教員と日本語教員双方の授業の共通点は重要な課題である。本稿では「授業力」のひとつとして、教員になるための「教育実習(模擬実習・教壇実習)の事前準備」について考える。

２．教育実習の前、教案を書く前について

国語科教員でも、日本語教員でも、教育実習前の準備・注意事項には共通するものがある。教科書や教材をよく読む、一コマの授業の目標を定めて準備する、それに合わせて副教材を準備する、などがあげられる。『Teach Japanese ～日本語を教えよう～第２版』(2003) には、以下のような記述がある。

（１）唯一絶対の教授法はない

あるよい教え方があっても、それを完全にマスターしても同じようにうまく教えられるようにはならない。

（２）教え方は変わる

目の前には生徒や学習者がおり、同じ生徒や学習者でもその日の様子や教える内容は変わらなければならない。

（３）教員の指導がすべてではない

指導する教員が「こうしたらいい」といっても、それを完全に模倣してもいい授業にはならない。実際、教えたことがない生徒の場合は、ほんの一部しか模倣もできない。

（４）自立した教員になる

自分で考えて、自分で授業を組み立て、問題解決をする力を養わなければならない。

３．今後の国語科教員と日本語教員の授業における共通した必須項目

ただし、今後、自律した教員になるために必要な事柄は、さらに存在する。ここでは、文部科学省の指針に沿って、二つの提案を行う。指針では今後の教育課程の在り方について、学習指導要領において示された資質・能力の育成を着実に進めることが重要であり、そのためには

新たに学校における基盤的なツールとなるICTも最大限活用しながら、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められるとしている。

（１）「教育実習(模擬実習・教壇実習)」における協働

「協働学習」と言う言葉がよく使われるが、ここではさらに異なる形での協働学修の可能性を提案したい。例えば、実習のサポートができるのは教員や同じ立場の同級生だけでなく、すでに実習を終えた、あるいは教職に就いている先輩の力を借りることも必要なのではないだろうか。双方にメリットがある「協働学習」となるはずである。

「協働学習」とは、生徒同士が話し合って研究を重ねる中で結論を導き出し、与えられた課題を解決していく学習法である。生徒が協力しながら１つのテーマと向き合うので、協調性を養いながら成功体験を重ねることができるとされる。協働学習は文部科学省によっても推進されており、今後の教育に不可欠となっている。

津田（2015）によれば、「協働学習」では、教師が「権威的」なことばで学習者を指導するのでなく、仲間と「内的説得力のある言葉」によって学び合う。その結果、はじめわからなかったことが「わかった」という達成感を味わえれば、次はもっと頑張ろうと思う気持ちが動機づけを高めていくという。教育実習の準備段階では、先輩学生のサポートにより、教案の書き方、授業の進め方など、より良い教育実習の準備ができるのである。

（２）ICTを効果的に使う能力

上記の「協働学習」にも、教える側にはICT能力が要となる。ICTを使用して、生徒や学習者に受け身ではない「調べる学習習慣」を身につけさせることができる。また、協働学習に使用した場合も、他者と意見の共有、視覚化に役立つからである。ただし、生徒や学習者にそのようなICTを使用した学びを実践させるためには、指導する教員のICT能力が必要となる。同時に、ICTをスムーズに使用できる環境作りも必須となる。

４．まとめ

本稿では、国語科教員と日本語教員の「教育実習(模擬実習・教壇実習)の事前・事後の振り返り」における「事前の準備」に焦点を当てて考察した。教育実習(模擬実習・教壇実習)において、実習を計画的に進めていくために大切な事柄の一つであるにもかかわらず、十分に認知・準備ができていないことが多い。まず、必要な準備をしてから実習授業の準備に取りかかることが肝要である。

参考文献

河野俊之（2003)『Teach Japanese ～日本語を教えよう～第２版』凡人社

津田ひろみ（2015)「働学習の成功と失敗を分けるもの」『リディアル教育研究』第10巻第２号

文部科学省「個別な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiouen/mext_01317.html

(2024年２月24日閲覧)

教職実践研究交流会の開催

史学科
准教授　鈴　木　宏　節

２０２３年度、後期開講の「教職実践演習」では、１０月７日（土）から８日（日）にかけて教育実習や模擬授業に関する研究交流会を開催しました。２０２１年度から史学科でこの科目を担当している鈴木は、２０１０年度から三重大学の教育学部で非常勤講師をつとめているのですが、この数年の両大学の課題―学生の要望―「授業の経験を積みたい」を踏まえて、この研究交流会を企画しました。

さて、１０月７日の午後にポートアイランド・キャンパスで研究交流会を、８日の午前に神戸市内でエクスカーション・歴史散策を実施しました。本学からは４回生が１２名、三重大からは５名の学生が参加。研究会の模擬授業には本学から２名が、三重大から２名が立候補してくれました。授業時間は５０分で、意見交換の時間もそれぞれ１５分とりました。また、全体総括として三重大学教育学部の大坪慶之教授と私が講評をおこないました。

〔模擬授業１〕神女大・戸田結月さん「高等学校社会科・歴史総合・冷戦に関する授業」

〔模擬授業２〕三重大・田原妃菜さん・山田彩乃さん（共同）「中学校社会科・歴史分野・元寇をテーマにした授業」

〔模擬授業３〕神女大・松原琴音さん「中学校社会科・歴史分野・摂関政治の単元」

〔模擬授業４〕三重大・鈴木智大さん「中学校社会科・歴史分野・江戸時代の文化に関する授業」

研究会の後はポートアイランド・キャンパス内で夕食を取りながら１時間ほどの懇談会をもちました。本学の学生は４回生ですが、三重大の５名の学生は２回生、３回生、４回生の混成でしたので、就活や採用試験など、それぞれ気になる話題に花が咲きました。

〔エクスカーション〕

JR 神戸駅→湊川神社→メリケンパーク→神戸港震災メモリアルパーク→南京町

本学の学生が企画したものです。各所で史跡の案内や見所の解説があり、史学科の学生らしいこだわりが光りました。

本学の学生は５月から６月にかけての実習でおこなった授業を再度実演することになりましたが、一度目とは違った授業になったと言います。また、同じ教職を目指す教育学部の学生の模擬授業に参加することで、これまでにない刺激を得られました。特に三重大の学生は附属中学校での「研究授業」を披露したのですが、その授業方法は本学の学生にとっては想像もできなかったようです。

教職実践演習としては、これまでにないはじめての企画でしたが、授業をするにせよ受講するにせよ意識的に練度を高め、かつ同世代の意見を聞ける経験は授業づくりに有為であること

が共有できました。また来年度もこうした研究交流会を実施する予定です。

【写真１】模擬授業１の様子

【写真２】模擬授業２の様子

【写真３】模擬授業４の様子

【写真４】模擬授業４の様子

【写真５】湊川神社での集合写真

【写真６】震災メモリアルパークの見学

【参考】

三重大学（津市）〔https://www.edu.mie-u.ac.jp/〕＞教育学部＞学校教育教員養成課程＞社会科教育コース

（社会科学・歴史学・地理学・哲学／倫理学・社会科教育学の５分野から構成）